



嬉泉の新聞 第54号 2004年(平成16年)3月発行(年3回発行)

発行所=社会福祉法人嬉泉

東京都世田谷区船橋1-30-9(〒156-0055) TEL 03-3426-2323

http://www.kisenfukushi.com E-mail:kisen@kisenfukushi.com

発行人=石井哲夫 編集人=小山裕子

「自閉症の息子から得た生きる喜び」

私は現在45歳になる自閉症の母です。3歳半の時、自閉症と診断され、今日に至っております。

息子はI.Q.28で重度判定を受けておりますが、けやきの郷の福祉工場で月給6万円を支給されて、グループホーム(7畳1人部屋)で生活しております。1万円の家賃と生活費3万円を支払って親から金銭的援助を受けず、年金は自分名義で貯金して400万円程あります。また素敵な余暇も十分に楽しんでおります。

人間として社会に責任を持ちながら生活する姿は、自閉性障害を持つ人達の中では、親馬鹿でなく本当に模範生だと自負しております。

しかし、自閉症と診断された時点では、この障害の持つ行動障害(固執、多動、他害、異食、オーム返し等)や言葉の発達の遅れ(今でも2文語が多い)等、の問題はすべて経験しておりました。山手線路への飛び出し、自動車への突進、ビルの煙突の先端まで昇る等、何度死に直面したか判りません。現在の息子からは想像もつきませんが、

このようなことを共に乗り越えるなかで、息子も私もどんな困難をも乗り越える力が培われたのだと思っています。この苦しみあってこそ、息子の思わぬ発達の喜びの変化に、私の心が踊るのです。この喜びは、障害の子供を持たない人達から見れば、何であんな事に喜ぶのかと思われることかもしれないことですが、一つ一つ積み重ねてきた努力が、何年も経って効果として突然出るので、涙が出てしまう喜びなのです。

私は、頼まれた講演の最後の締めくくりの言葉を、「息子は私の手作りの宝物です。私をこの壇上で話をさせる様にしたのは息子です。私の一番不得意であったことに、喜びを感じさせてくれるのです。」としています。

日本自閉症協会 副会長 須田 初枝

何故ここまで二人が成長出来たのかを考えますと、多くの関係者及び、周りの社会の方々の温かい心に今日まで支えられていたからだと思えます。

昭和42年に自閉症・親の会を発足させ、次年度に全国組織の協議会を設立して、昭和64年に社団法人日本自閉症協会となるまで、全国の親たちが一丸となって、自閉症の正しい理解と啓蒙と、行政活動を、今日まで35年間子供たちのために、努力し続けてきたのです。そして義務教育終了後の受け皿として、知的障害者福祉法による成人専門施設を設置していったのです。他の知的障害とは異なることが最近理解されはじめており、平成14年度には厚生労働省より予算要求され「自閉症・発達障害支援センター」が実施された所もあります。

個人的に努力したことは、学校に入れて貰うことから始まり、3年間私が付き切りで学籍無しで通いました。その時に様々な障害の児童と接して、大変な親たちが多々居られることも知りました。

又、物事の善悪、社会的ルール、自己制御の心を育てる等、自立したときに必要なことを、私も社会にでて現場で教え、褒めたり、叱ったりしながら今日に至っております。息子は、一人で考えた生活が何処まで出来るかを、函館のおしまコロニーの青年寮生活、雲丹箱作り、吹雪の中を五稜郭まで通う中で培いました。又、けやきの郷では働くことを中心に7気圧のエアーガンで荷台作り等、その中で、男としての責任とプライドを身につけることができました。けやきの郷の私の理念である、自閉症の人達が、喜怒哀楽と責任を持って人生を送ることを、目標にして努力することが私の夢です。

社会福祉援助論

石井 哲夫

— その17 —

援助者が援助過程に利用者から受ける重荷は、利用者の状況によっても違いがあるが、概ね、心に葛藤や挫折感、さらには欲求不満などが渦巻いていることから、その混乱に巻き込まれてしまうことが多い。

援助関係は、行為的關係だけではなく、感情的な關係が主となる事が多いだけに、援助者は、利用者の感情面に注目していることが大切であり、そう援助者にも指導をしてきた。それだけに援助者は、利用者のこころの重荷を受けて、自分のこころも混乱してくる。援助能力が高い人は、おそらく身のこなしというか、心のこなしが巧みであって、自分の気持を自ら変えることの出来やすい人である。そうでなければ、援助者のストレスが高まってトラウマを創りやすくなってしまふ。

事実、表には出てきていない心

の傷を受けて、神経症や鬱病を発生することになった援助職員がいる。数としては多くはないが、この人達は真面目な人が多く、成果を上げようと気張ることで身動きが出来なくなるようである。

考えてみると、自閉症者や精神障害者などは、自分自身で自分の気持を納めることが出来にくい状況にあるだけに、好意を持ってくれる人たちがそばにいて自分の気持を受けとめて交流してくれることが必要なのである。それが多分に家族であり、また援助職員でもある。従って、利用者や家族に接触していく職員は、家族同様に巻き込まれやすいのは当然なのである。しかしこのことがあってこそ、利用者の感情がしこらずに癒されることになるのである。特にトラウマを抱えた利用者は、繰り返し繰り返して、感情的になつてしまふ、家族や援助職員を繰り返し巻き込

んでいくわけである。職業として利用者と共感することを大切に考えている職員の方が、時には利用者突き放してしまっている家族より大変な思いをすることになることも否定できない。我々援助職員はあくまでも黒子に徹し、親子関係を優先させて家族援助を行わなければならない。

この仕事を個人で引き受けようという援助者もいるが、精神分析とは異なって、特定の理論で割り切れないだけに、利用者に接するモードと、援助者が個人でいる時のモードとは大きく変わってくることになる。無造作に自分本位の感情で利用者を制圧してしまう援助者は、援助者とは言えず、利用者に寄生している者である。利用者や家族と共生感覚を持てば持つほど自分が身動きできにくくなるのが、社会福祉援助者という職業なのである。そこで援助者集団のレクリエーション活動が必要になつてくるのである。どういうレクリエーションが必要かは言うまでもなく、相互で支え癒しあうことである。

私の社会援助論も、ここで社会

福祉施設なり、社会福祉法人なりの組織論と結びついていくことになる。安心して、気持よく自尊観を持って働くことが出来るような仲間関係が求められているのである。しかしこれは、一面において、職員の研修や専門的なスーパービジョンと相容れないことであるので、この辺の多面的なモード代替が求められることになるのである。

思い起こすと、長年にわたりこの仕事に就いてきたが、今振り返ると初期の頃、日本社会事業大学(当時短期大学) 児童相談室の学生達と仕事以外に毎日のように夕食を共にして語り合っていたことがあり、それが社会福祉法人嬉泉のこの時代までも継承されている。特に職員の主だった人たちが、いつも気持が通じ合って私を囲んで話の花を咲かせられることや、研究会の後の懇親会で、違う職場の人達と交流しろといくら言っても、同じグループの人達が固まって飲み食いすることになる傾向は以上の理由からなのであろう。その代わり日常の仕事の場面ではお互いに厳しく牽制しあっているのである。

私たちの世田谷からの発信

自分を、仕事を、仲間を見つめる
「第3回世田谷りはねっと
フォーラム」に参加して

浅見 由希

○研修の内容

この会は、世田谷区にある高齢者・障害者・児童といった、それぞれの分野の施設や関係機関が互いに円滑な連携をとるために、実務者が直接顔を合わせながら必要な情報交換や事例提供をして、現在の問題を検討しあうという場で、世田谷区地域リハビリテーションの推進目的として毎年一回開催されています。

午前中は国立成育医療センターのDIによる基調講演があり、午後は各分野に分かれての分科会が開かれました。特に、めばえ学園の関係する児童の分野は初めて分科会にこぎつけたという経緯から、

まずは関係者がお互いの名前と顔を照らし合わせて話をしようというのが、今年のテーマとなっていました。

私の現在の日常業務では外部の関係者との接点はほとんどありませんが、この機会に色々な機関や関係者がいることを知っておこうという気持ちで臨みました。

○研修の後に：①

個人的には、久しぶりの外部研修に参加してとても新鮮な気分になったのと同時に、外の風に当たらなければ分らなかったこともありました。

例えば、フォーラムの中で日々の療育や関わりについて、悩みや行き詰まりを感じながらも個人レベルで抱えている現状があるという話題が出て、組織の中でスーパービジョンが日常的に行われている嬉泉では考えられないことだと思

いました。

又、他施設では児童なら児童、成人なら成人という限られた時期での援助が行われていることが多い中、嬉泉の法人内の各事業所では広い範囲での援助が行われており、関わっている利用者を様々な観点から捉えることが可能で、職員間の情報交換や研修にもなりうるということが、他施設にはない大きなメリットと感じました。

そのような研修や出張への参加の機会を持つことは、色々な立場の職員にとって必要なことだと感じました。

新人でも中堅でも、経験年数なりの仕事に対する想いや理想がある反面、ジレンマ・焦燥感や精神的疲労等はスーパービジョンがあっても、なかなか消化しきれないこともあると思います。

しかし、外に出るとそういった「自分の仕事はどういうことなのか」という根本を客観的に見つめたり、自分の属している組織・嬉泉についても、自分なりの評価や認識を新たに持ちやすくなります。それが、仕事に対する姿勢や価値観となつて、ゆくゆくは日々の仕事に還元されていくように思いま

した。

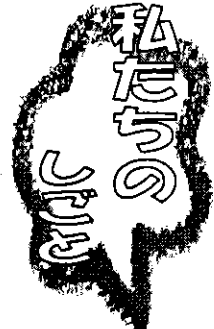
○研修の後に：②

フォーラムで得た情報を元に、実現したことがあります。それはめばえ学園のお子さんの何人かが国立成育医療センターに通っているのですが、その実際の作業療法場面を見学出来たことです。

今までなかなか足を向けられなかったことが、「いろいろな見学者を受け入れている」「センターで行われていることを外部に知ってほしい」というフォーラムでの情報をきっかけにして、敷居の高さを感じずに出向けたことは大きな収穫になりました。

一人のケースの発達について「どのような援助が必要か」「相手の機関に何を望むのか」「自分たちは何が出来るのか」、それぞれ専門性を明確にしながら伝え合うことがいわゆる「連携」と言われていることになり、それがプロの仕事だというフォーラムでの講演の話が思い出され、「連携」ネットワークに一歩足を踏み入れたという手応えが感じられた出来事でした。

(めばえ学園職員)



赤塚からの発信

「世界に一つだけの花」

三浦 佳代子

今年も一月三十日に板橋区主催の「障害者の日」記念行事があり、音楽会と作品展に参加しました。音楽会では、昨年、挑戦した『よさこいソーラン』（TV番組『金八先生』で踊っていたものをアレンジしたものです。）を、今年には更にバージョンアップさせ、また昨年大ブレイクした『世界に一つだけの花』に新たに挑戦しました。

この音楽会には、障害を持った方々が多くの人たちの前で演奏し、大きな拍手をもらい、舞台上で演奏する喜びを味わってもらいたいという願いで取り組んでいます。また日々の音楽活動を通じて、保育園や小学校、地域の人達との交流を持ち、障害を持つ方々への理解を深めることにつなげていきます。



得意のパーチャイムの演奏です

今年、挑戦した『世界に一つだけの花』は、合奏に加え、手話を交えたダンスをアレンジしました。『ナンパーワンでなくてもいい、（みんな）一人ひとりが大切なひと』というメッセージを込め、障害を持った方々が手話で表現をし、健常の方々に向けて発信するという大きな意義を持たせました。これは練習を重ねていく中で、単

なる音楽会での発表という枠を超え、フジテレビの番組でスマップと一緒に踊りたいという大きな夢に変わっていききました。

そして迎えた本番当日。自分たちの出番を緊張して待つ方、やや待ちくたびれた面持ちの方など様々な表情が見られましたが、出番をワクワクしながら待っている方も見られました。

— いざ、本番。音楽が鳴り始めると、皆、やや緊張しつつリズムに乗り始めました。曲が進むにつれ合奏隊もコーラス隊も盛り上がり、いき、今ままで一番上手な演奏をし、大きな声でコーラスをし、踊りは身体全体で表現できていました。何より、『世界に一つだけの花』では観客を巻き込み、会場中が一つのハーモニーを作り出していました。そして『よさこいソーラン』では掛け声と拍手と大きな大きな歓声に包まれました。

あの緊張感の中で一番良い演奏が出来たことは、参加した利用者にとって大きな達成感になり、大きな力となったように思います。仲間と共に舞台上がり、身体全体で表現し、心から楽しみ、演奏をして、その結果、一人ひとりが



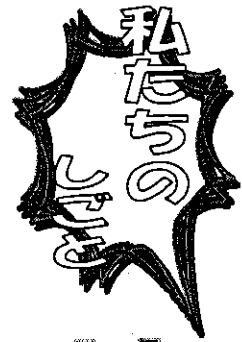
ステージの上で笑顔いっぱい

観衆に向けてメッセージを送りました。この音楽会を通じ、練習を重ね、音楽の楽しさを味わい、舞台上に立つことの緊張感、仲間と一つのことをやり遂げた大きな達成感を得られたのではないかと思います。

(更生施設職員)

『今年の「障害者の日」記念行事音楽会』では、僕はエレクトーンと大太鼓をやることになり少し不安でしたが、当日は、ボーガルの稲津さんの声も良く出ていたし、僕の太鼓とソロ演奏もうまくいったので大成功という感じでした』

(参加した利用者の感想)



私たちの袖ヶ浦からの発信

「のびる学園の短期入所事業」

松田 香

平成八年から千葉県指定を受け「短期入所事業」のサービスを提供してきました。

平成十五年度は、支援費制度開始にともない「短期入所」の需要が高まっています。

自閉症児で問題行動があると、なかなか短期入所では受けてもらえない現状があるようで、袖ヶ浦のびる学園を利用されるケースがいくつが続いています。

週一回、半年程度の利用で家庭生活の問題性が改善されたケースもあり、発達支援も含めた短期入所の必要性を実感しています。

また、平成十五年度は、以前より取り組んでいた地域療育支援のセッションを地域生活支援センター「たのしみ」として立ち上げ、地域の細かいニーズに応えています。

身近な地域、君津圏域のニーズは「たのしみ」が対応し、学童保育の支援や週末の生活支援などの利用で、昨年の三倍以上のニーズに対応しています。広域のニーズは袖ヶ浦のびる学園が対応しています。

加えて、児童相談所との検討事項としては「児童相談所が短期入所の登録事業を行っていたときは、登録書が自動的に送付されてきたが、児童の実状については詳細なアセスメントが取り難いので、何らかの形で情報提供して頂けないものか?」「サービス調整会、ケア会議などが必要になった場合に、児童相談所に参加して頂けるのか?」等、話し合いをしています。入所児童の地域移行をすすめることにもない、袖ヶ浦のびる学園を退園した利用者のアフターケアを行うことも視野に入れていきます。

まだまだ困難な状況はありますが、実績を積んでいくことが重要であると思っています。

(袖ヶ浦のびる学園職員)

「グアム旅行」

川相 智史

袖ヶ浦ひかりの学園でグアムに行ってきました。

利用者も家族も海外旅行はひとつの夢でした。

利用者と家族の旅行を始めて十年余り。第一回はすべてバスで移動。ホテルも貸しきりで、調度類もすべて片付けてもらったのを覚えていきます。

今回のグアム旅行は、少人数とはいえ、飛行機での行動、宿泊はリゾートホテルと第一回は雲泥の差です。

それにしてもハードなスケジュールでした。深夜便での移動。眠気と、耐えられない蒸暑さのなかでの観光。そして、緊張。昨年のはじめて飛行機を使った旅行では、利用者が空港で見知らぬ人をたいてしまったことなど、いろいろあったからです。

でも南国の空気と、周囲は英語

というのが返ってわれわれをリラックスさせてくれたようでした。

最初は緊張していた利用者も、波打際のプールや潜水艦での海底散歩では本当に楽しそうでした。海の蒼さに見入る利用者。サングラスでタイムネーター風にきめた利用者。珍しいトロピカルカクテルにほろ酔いの利用者。そうそうプールでのハプニングもありました。

それぞれがよい思い出を作ってくれたと思っています。

そんな中での一番の印象は、お母さんたちの元気でした。プールでの深刺、レストランでの健啖。もう三十年は大丈夫と思えました。

(袖ヶ浦ひかりの学園職員)



潜水艦「ABOTTO」内窓に釘付け

嬉泉トピックス

二報告

◆第1回高機能広汎性

発達障害セミナー

(1月17・18日)

平成15年度の冬のセミナーは、自閉症治療教育実践講座を衣替えし、今日注目されている「高機能広汎性発達障害」のセミナーを企画しました。

90年代に入り、ドナ・ウイリアムズをはじめ自閉症と診断された当事者の方達による発言を契機に高機能広汎性発達障害が(アスペルガー症候群或いは高機能自閉症等)にわかに注目されてきました。

今回のセミナーの企画に際し、東海大学教育研究所教授山崎晃資先生からご助言を頂き、テーマを「高機能広汎性発達障害の基本的理解を深める(医療・心理・福祉の立場から)」とし高機能広汎性発達障害の概念を理解すると共に、

様々な事例をとおして先駆的に取り組まれている講師の方々から貴重なお話を伺いました。1日目は医療の立場から山崎先生が「いわゆる軽度発達障害について」、心理の立場から石井哲夫先生が「発達障害における高機能の心理学的所見」、更に医学的観点から滋賀大学助教授十一元三先生に「高機能広汎性発達障害の司法事例について」ご講義頂きました。2日目はシンポジウムとし、中京大学の辻井正次先生・ながやまメンタルクリニック臨床心理士千田若菜先生・東京都自閉症・発達障害支援センター主任支援スタッフ小山裕子先生にご登壇頂き、それぞれの実践の立場から貴重な報告を頂きました。参加されたフロアーの皆様からも熱心な質問が飛び交い、講師の先生方も事例を交えてお話し下さいました。

(セミナー事務局 柳 淳一)

◆発達障害療育研究会

第八回研究会

(1月24日)

今回のテーマは「LD、注意欠陥/多動性障害、高機能広汎性発達障害への特別支援教育」。参加者は全国から約130名。分野は、多岐に亘り、このテーマへの関心の高さと幅広さが伺われました。

午前は、一般演題(実践研究発表)の発表で、活発な質疑応答。

午後に、文部科学省特別支援教育課の石塚謙二調査官による特別講演。最もホットな話題を各種資料をスライドで提示しながらお話し頂きました。さらに、本テーマのシンポジウム。医療分野から白瀧貞昭武庫川女子大学教授、教育分野から江戸川区下鎌田小学校の有澤直人教諭、心理、からは高山恵子えじそんくらぶ代表、そして福祉から加藤正仁うめだ・あけぼの学園園長がそれぞれにご発表。時間一杯フロアーの参加者を交え、活発な議論が展開し、実り多い研究集会となりました。

(研究会事務局長 友田篤)

◆ご寄付のお礼

子どもの生活研究所で頂いた寄付をご紹介させて頂きます。

○世田谷区を通じての

区内在住の方々からの寄付金利用者の方などがインターネットを利用できるようにするためのLAN配線工事の実施と活動用備品の購入を行うこととなりました。

○東京善意銀行からの配分品

ラミネーターの配分を受け、早速利用者の方々が使用する教材作り等で活用させて頂いています。

今回ご紹介させて頂いた他にも多くの方々から温かいご好意が寄せられております。誌面をお借りして感謝申し上げます。

(子どもの生活研究所 小池朗)

二案内

◆アトリエAUTOS展

日時…5月13日(土)25日(日)

場所…玉川高島屋本館

RFギャラリー

お問い合わせ…社会福祉法人 嬉泉

03-3426-2323

嬉泉のQ&A

お題其ノ八

『人事考課②』

事務局長 石井 啓

(前回からのつづき)

東京都の制度改革に伴う「公私格差是正制度」の廃止を契機に、嬉泉は、懸案だった給与制度の見直しを行いました。それは、経歴年数偏重型の「年功給」から、職員能力重視型の「能力給」へ、職員の本俸給与額の格付方法を転換するということです。そして、その新たな給与制度を有効に機能させるために、人事考課制度を導入したのです。つまり人事考課によって、各職員が担っている職責に相応しい働きをしているかどうかや、与えられた職務に対してどれだけ遂行能力を発揮できているかといったことを評定し、それに基づいて本俸給与の金額を決めていく訳です。

Q 参…嬉泉の人事考課制度の特色はどのようなものですか？

A 参…嬉泉の人事考課制度は、前述のようにそれ単体で成立しているものではなく、職能給制度とリンクしたものとして作られました。しかし人事考課の目的は、単なる給与の上げ下げだけではなく、職員それぞれの不得手な部分を伸ばしたり、新たな能力を開発する機会に結びつけたりと、むしろ人材育成に繋がっていくべきものと考えられます。従って人材育成制度とも密接に関連付けていく必要がある訳です。現状として必ずしもこの部分があまくいっているとは、正直言い難いところもあるのですが、少なくともそう出来るように設計されていると言えます(大きな特色であると言えます)このように複数の制度が相互に補完しあうような構造を持つ仕組みを「トータル人事システム」と言います。

Q 四…では、嬉泉がトータル人事システムを運用している上で、どういったことが課題や問題になっていきますか？

A 四…問題のひとつとしては、先に触れたように、人事考課と人材育成の仕組みが有機的に結びついているとは言えないことから、人事考課が賃金管理のためツールになっていく恐れがあるということです。これは今後の課題でもあります。

今ひとつは、職能給制度に転換し、人事考課の結果のみに基づいた、職員にとってはある意味公平な賃金処遇が実現した訳ですが、実は転換するにあたり、今までの給与額を全く無視する訳にはいかず(というか、ほとんどそのままスライドさせたので)、以前の年功給の時の歪みを引き摺ったまま新しい給与額がスタートしているのです、この歪み(上司と部下の給与額の逆転現象など)を是正するのに、今後大変な時間を要するだろうということですが、毎年少しづつは是正してはいますが、年功給時代に開いた溝を埋めるのは容易ではなく、非常に困難で且つ深刻な問題であると思っています。(おわり)

編集後記

東京都自閉症・発達障害支援センターが白梅学園短期大学と共催で、「自閉症の理解と援助：なぜ自閉症はわかりにくいのか？」というテーマで企画した療育講座に、六百名近くの受講希望者が集まった。3月13日の講座なので、(締め切りの関係で)この紙面では当日のご報告は出来ないが、「自閉症はわかりにくい、分かったらいい」という方がたくさんいることを実感する。自閉症・アスペルガー症候群等の自閉症圏の障害は「見えない障害」といわれるように、外側から計り難いハンディが、広範囲に深く現れる障害である。そのことは専門に支援する者として知ってはいたが、「当たり前だ」といわれていることが分らない。「常識が分らない」「いつも困っているので、「困ったことがあったら相談に来なさい」と言われると、どうしたらよいのか余計に分からなくなる」などの当事者の生の声を聞くと、「まだまだ彼等のことで知らないことが多すぎる」と自分自身も感じる。本当に奥深さを感じさせられる。(編集人 小山)

ひかりのタイムス

独立第48号

「ひかりの親子旅行」ではじめての海外(グアム)へ参加した利用者から、旅行の感想を寄稿していただきます。(以下原文のまま)

「グアム旅行」

伊藤 訓育

ぼくは、初めて海外に出かけました。

グアム旅行は十一月五日に出発し、おかあさんと、一緒にいきました。

潜水艦とドライブにいきました。

ホテルで泳ぎました。

グアムはなぜこの時にいったのか、またアメリカ軍があるところですが。

メンバーは小山、一尾、川相さんと利用者および保護者から伊藤市川、田村、山岸、小原、浜ノ園さんでした。

ぼくはグアムで楽しかったです。こんどは国内で一本化したいと思

います。

ホテルでゆっくりしました。十一月八日に日本へもどってきました。

ぼくは良い思い出でしたと思います。

海外旅行とパスポートは初めてでした。これからは国内でしよう。(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

「平成十五年の旅行ついて」

市川 幸志

平成十五年今年は九州旅行が七月、吉田合宿八月、グアム旅行が十一月と三回旅行があった。

グアム旅行は海外でも始めてで、行ったことないアメリカでたのしかったです。

海にはあぶなくて入れなかったが、海を見られたし潜水艦で海にもぐったのが始めてで、魚がいっぱいいた。島なのでせまかったし、田舎だった田んぼもあった。三泊四日で行った。行きと帰り

は夜行だった。十時に出て四時についた。

帰りは一時に出て七時についた。ひさしぶりに夜行夜通したのしんだ。

つかれたこともあり、帰ってきたらすぐねた。一日中休んだ。帰りは成田空港から電車で帰ってきた。

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

「グアム漫遊記」

山岸 裕

03年11月ひかりの学園の有志で、グアムに旅行に行った。

3時間の時差で、時差ボケして、深夜のグアムに来了。

グアム側は日本人観光向けに日本語を使う。巨人もグアムでキャンプを張るので、巨人歓迎の広告があった。

夜バスでホテルに行く。夜のグアムはアメリカ領の植民地のせい、アメリカ企業・店が進出してた。

朝は朝食取った後、観光でグアムに行く。グアム側は島の南側で横井さんが発見されたということを説明する。この地で戦争があった。幾多の苦難はあったが、グア

ムの島はすべてを受け止めて21世紀、平成の世も、大自然の懐は深かったように思えた。

恋人岬により、昼食、御土産店、買い物、プールや海に泳いだ。スケジュールは流れた。

翌日は深海に潜水艦で潜り、海の魚を見た。深海の世界に漂う感じがした。

おみやげ買ったりした。天候は恵まれた方だった。海外に行くと、時計を現地の時間に合わせてたりして大変だった。

グアムは暑いから半袖。日本は二月は寒いから長袖。季節に合う服装を調整するのに苦労した。

グアムから日本に帰り時計を調整した。飛行機で3時間かかる。翌日時差ボケした。巨人の選手や、故横田氏、観光客・グアムキャンプに同行する報道陣は時差ボケするグアム旅行・仕事を。その度に季節に合わせた服装・時計の調整をするのだから大変だと思っ

た。親子新年会の時、保護者が川相園長に海外旅行に又行きたいという。この人達3時間の時差を苦にせずタフだと私は思った。(グループホーム・春のひかり支局長)